

英作文指導における文の意味の扱い方 に関する一考察

相川 由美

0. はじめに

本稿では、日本人英語学習者の特に初級学習者が英語を書く際に陥りやすい間違いに焦点を当て、なぜそのような間違いを犯すのか分析し、それを克服するためにはどのような指導法を行うのが妥当なのかについて、言語理論の観点から考察する。

日頃学習者と接していると、読解はある程度できるのだが、英作文となると途端に書けなくなってしまうというパターンが散見される。また、学校英文法で一般的に学習するいわゆる『5文型』がどんなものかについては、文法書に載っているような一般的な説明は出来ても、それを実際に使いこなすことができない者や、「じゃあ目的語って何？」とか「補語って何？」と尋ねると、何も言えなくなる者もよく見られる。なぜこのようなことが起こってしまうのだろうか。

そこで筆者は、学習者が実際に書いた英文から誤文を選びなぜ間違ってしまうのか分析した。その結果、文の構造と意味とが結び付いていないのではないかと考えるに至った。特に、動詞の意味をしっかりと捉えていれば防げる間違いが多々あるように思われる。ことばというものは現実社会の中で使用されるものである以上、意味を避けて通ることはで

きない。しかし、英文法の細かい規則や文法用語を知っていることが英語を分かっていることと考えられる向きもあるためか、文法と意味とを切り離してしまいがちな面もある。また、特に初級学習者向けの教材を見ていると、文法事項をなるべく簡潔に解説し、パターンプラクティスでそれを習得させようとするものが多い。初期の段階ではとても有効な方法であるが、やはり実際の英語使用を考えると歪みが生じてくるのではないだろうか。

もちろん、英語の文構造を理解できていなければ英文を書くことはできないのだから、英語の5文型に代表されるような学校英文法と呼ばれるものに大きな意義はあるが、それに不足していると考えられる意味という側面を補うものとして、選択体系機能言語学の理論を活用して、意味と構造を結び付ける指導法を提案したい。

なお、本稿で扱う英作文は、この指導法の学習者の対象が初級学習者のため、パラグラフライティングのようなものでなく、センテンス単位で意味の通る英文を書くものとする。

1. 学習者が書いた誤文の分析と文構造の把握

本節では学習者が実際に書いた英文の中から特徴的であると思われるものをいくつか選択し、なぜそのような間違いをしてしまったのかを考察する。

1.1 誤文の例¹

1.1.1 動詞を連続して並べた文

- (1) * He is run fast.
- (2) * She take have a shower every day.

(1) は be 動詞と一般動詞の原形を並べてしまうもので、授業中にもしばしば見られる間違いである。be 動詞と一般動詞の違いとそれらの機能をはっきり認識していないために起こる間違いと考えられる。(2) に関しては、take と have 二つの一般動詞の原形を並べている。これは“take a shower”は覚えていたが、have をくっつけてシャワーを浴びる雰囲気を出そうとしたのかもしれない。

両者とも学習者は、文中の動詞の意味と目的語との意味の繋がりを考えず、何となく文を書いたように思われる。そこを理解していれば、動詞を二つ置くことなどしないはずだ。また、学習者は『品詞』というものをあまり理解していないのではないか。授業中にも学習者の品詞への理解不足は感じるところであるが、品詞を正しく理解できていれば、動詞を二つ置いてしまうような間違いはなくなるのではないだろうか。

1.1.2 be 動詞のない文

(3) * Please quiet here.

これも複数の学習者にあった誤文で、学習者は命令文の文頭には動詞の原形を置くという規則は理解しているであろうが、quiet という形容詞があるため、これに惑わされて be 動詞が抜けてしまったと考えられる。日頃の授業でも、SVC の文構造の文を書く場合に be 動詞がない文を見かけることがあるため、やはり学習者にとって be 動詞がどのような状況で使用されるものなのか理解するのは難しいと言える。

1.1.3 動作主と被動作主の関係をとり違えている文

(4) * The book wrote her.

この誤文は、write は他動詞のため目的語を取るから後ろに目的語を置いて、それらしい文を作ったと見られる。他動詞 write の目的語との意味関係を考えれば、明らかに防げる間違いだと言える。これは動作主と被動作主の関係が把握し切れていないからだとも考えられる。また、受動文を使おうとしたが書けなかったかもしれない。文法のテキストでは、能動文から受動文の書き換えやその逆の書き換え等が頻繁に見られるが、このような問題を繰り返すことにより、学習者は機械的に形を覚えることになってしまい、意味を軽視する傾向が出てくると思われる。よって、態の書き換えを行う際には文中の要素の意味や機能を十分把握させるようにしなければならないだろう。

1.2 英語の5文型の捕らえ方

筆者は学習者が5文型についてどれくらい知識があるか確認するため、その説明を書かせた。これを行ったのは、5文型が英語の文構造を捕らえる上でやはりなくてはならないものであると考えたからだ。また、文構造をどのように捉えているのか、文の要素の意味、機能を理解しているのかも読み取れると考えたためである。

その結果、120名程度の学習者のうち、およそ8割が第1文型はSV、第2文型はSVC、第3文型はSVO、……という説明はできていた。しかし、文型を知っているだけの者がほとんどであった。筆者が期待したのは、動詞の種類や目的語、補語がどのようなものであるかの説明、つまり文の要素の機能の記述がなされていることであったが、そういったことが書けていたものは皆無であった。

また、それぞれの文型の例文も書かせたが、文型に合った英文を正確に書いている者はおよそ40パーセントで、SV、SVC……は書いているのに、例文を全く書けないか一部しか書けない者が15パーセント程度いた。

このことから分かったのは、英語の構造を捉える上で重要な役割を果たしている5文型が、実際の英語指導の場であまりその効果を発揮していないことであった。英語学習でしばしば使用される文法書を見ても、文型は初期の段階で紙面を多く割いて解説されているが、文の中でそれぞれの要素がどのような働きを持ち、それぞれの要素が意味的に見てどのような関係を持っているのかを解説している訳ではないように見える。どちらかという細かい規則を並べているという印象である。

次の文は授業中にあった、単語の並べ替え問題に関する誤答である。

- (5) a. * Advised me my parents against the credit card company statement
to check the original receipt
- b. My parents advised me to check the original receipt against the
credit card company statement.

誤答の特徴は、一般的な英語学習者であれば当然知っているべき「文頭には主語、次に動詞を置く」という決まりが抜け落ち、動詞が文頭に來ていることである。なぜ、aのような間違いを犯してしまったのだろうか。

前述のように5文型は文の要素を把握するには有効な手段だと考えられるが、知識として知っているだけでは実際の英語使用の際役に立たない。aのような間違いは、知識として5文型を知っているだけで、恐らく文の中の各要素がどのような働きを持って、それぞれがどのように相互に作用しているか、全く理解できておらず、何となく並べてみた例であろう。また、ここで気になるのは、bの正解では文の後ろに回されている“against the credit card company statement”の副詞的要素を、文の真ん中辺りに持って來ていることである。5文型では副詞的要素(adverbial)は特にどの要素にも入れず考慮していない。このことが学習者に混乱を与えているのではないか。Quirk *et al* (1985: 53)はいわゆる

5文型に新たな要素である副詞的要素を加えて7つの文型の捉え方を提案している。²これにより、aのような間違いを防ぐことができるかもしれない。

ただし、やはりどんなに文の構造の規則を作ったとしても、実際の言語使用を考えればやはり文の中での各要素の機能や意味的な結び付きを理解しないことには、正確な文を書くのは難しいと言える。これが現在の英作文指導の問題点だろう。

1.3 誤文に関するまとめ

前述のように、学習者がどの誤文に関しても文の中の構成要素の意味や、それが文の中でどのように機能しているかを理解していないことから、様々な間違いが起こっていることが分かった。これらは文法事項の知識と実際の使用が結び付いていないため起こってしまう。これを防ぐ手段として筆者は、特に文の中の動詞の意味や機能に着目したい。

龍城(2006:38)は文の中で基礎となる要素は動詞で、それを中心として話し手が言いたい内容を表現するので、その文の中心となる要素は動詞だと述べている。このことから、まずは動詞の意味、機能を正しく理解することが誤文を避けるには必要であろう。よって次節では、動詞を中心とした文の構成要素を意味という点から、言語学的にどのように見ているのかを述べていく。

2. 選択体系機能言語学における文の構造の考え方

前節を踏まえ、本節では言語学的に文の構成要素を分析するため、選択体系機能言語学ではどのような考え方がなされているのかを概観する。なお、この理論は非常に幅広い内容を扱っているので、学習者の誤

答を防ぐのに必要だと思われる部分に絞って概観していく。

2.1 選択体系機能言語学とは

まず、選択体系機能言語学の理論の基本姿勢について述べる。この理論が他の言語理論、特に理論言語学と大きく異なる点は「社会の中で使われている言語の機能」という考え方を取っていることである。つまり、人がことばを使うのはそれで何かをするため、その目的に最も適した方法を選んで、最も適した表現を選んでいるという事実に基づくものと言える。よって、言語を使用する際に文化や状況といったコンテクストを重視している。そのため、言語を複数の側面から分析する方法を取っていて、これが言語のメタ機能と言われる概念である。この機能は一つの文を3通りの視点から分析し、その文が言語の外の世界とどのように関係しているかを示すものである（龍城 2006：1-3）。

また、龍城（2006：37-38）によれば、人は日常生活の中で言語を使用する時に事物、事象、状況の三つの要素を必要としていて、この三つを用いて自分の経験を話すことができる。よって、人はこの三つで経験的意味を表しており、これらの三つの要素が日常生活の中で単語として具現され、それが集まって節を形成する。なお、この理論では伝統文法という文に対して、主語（Subject）と定性（Finite）と呼ばれる要素を含む単位を節（clause）と呼んでいる。

2.2 文の構成要素の範疇の具現に関して

一般的な人の経験の範疇（事物、事象、状況）は日常生活では単語（語彙）として具現され、それらが集まって節を作り上げるので、特に大切なのは話し手が何を「する」（事象）のかということになる。これは伝統文法の「動詞」にあたり、この「動詞」によって、「誰が」「何を」という範疇（事物）も決定されることになる。これらは伝統文法ではそれ

ぞれ「主語」「目的語」として表される。ただ、これらの文法用語による文の分析だけでは人が話している内容を的確に分析しているとは言えない。それは、「動詞」と言っても、人間の内的、心理的作用を表すような *think, see* のようなものもあれば、人と人、人と物、物と物などの関係を表す *be* 動詞のようなものもあるため、その表す内容は非常に様々である。このように、動詞を基礎として、話し手が行う節の構成（つまり節を発すること）は経験的機能では、意味内容を表現する過程（*process*）を具現すると言うことができる。その際、中心的な役割を演じるのが、その過程の中心となる要素（伝統文法では動詞群）で、これは過程中核部（*Process*）と呼ばれている。また、この過程中核部によって明確にされる事物（名詞または名詞群）は、この過程への参与要素（*Participant*）と呼ぶ。そしてそれが起こる、またはそれに関わる状況（副詞群、前置詞群）を状況要素（*circumstance*）と呼ぶ。そしてこれら3つの要素が、人がコミュニケーションをする場合に具現し、話し手の言いたい内容を構成するため、この体系のことを過程構成（*transitivity*）と呼ぶ。この過程構成という概念はつまり、語彙とそれが連なっている節の意味化（*semanticization*）のことで、もっと簡単に言えば、節の意味構造を表している（龍城 2006：39）。次の表は群と句の典型的な経験的意味を表にしたものとその例である。これにより、文法的範疇と経験的意味の範疇を対応して考えられる。

表1 群と句の典型的な経験的意味

type of element	typically realized by
(i) process	verbal group
(ii) participant	nominal group
(iii) circumstance	adverbial group or prepositional phrase

(Halliday and Matthiessen 2004: 177)

表2 群と句の典型的な経験的意味の例

the lion	chased	The tourist	lazily	through the bush
participant	process	participant	circumstance	circumstance
nominal group	verbal group	nominal group	adverbial group	prepositional phrase

(Halliday 1994: 109)

ここで、前述の節の文法範疇がどのような経験的意味で具現されるのかを、再度まとめておく。

1. 文法範疇の名詞群によって具現されるのは、参与要素
(時には前置詞句や埋め込み節による場合もある)
2. 文法範疇の動詞群によって具現されるのは、過过程中核部
3. 文法範疇の副詞群や前置詞群によって具現されるのは、状況要素
(時には名詞群で具現される)

(龍城 2006 : 58)

2.3 節における過程型の種類³

話し手の伝えたいことを具現しているのが過程ならば、節の中心となっているのが過过程中核部である。この過程型は、人の社会的経験で起こる様々な事象を分類して、それぞれ異なった型で表されることとなる。

そして、この過程型は、以下のように経験的意味によって6種類に分類できる。また、これらは全て文法範疇という動詞によって具現される。

1. 物質過程 (Material) doing 身体的、物理的、物質的
2. 行動過程 (Behavioural) behaving 生理的、心理的
3. 心理過程 (Mental) sensing 感情的、知覚的、認識的

- | | | |
|-----------------------|----------|-------------------|
| 4. 発言過程 (verbal) | saying | 言語的、信号的 |
| 5. 関係過程 (Relational) | being | 対等的、信号的 |
| 6. 存在過程 (Existential) | existing | 存在的 (there exist) |

(龍城 2006 : 42)

これらの過程型は一見、それぞれが独立しているように見えるが、境界線は曖昧で一つの円でつながっている。その状態を表しているのが図 1 である。

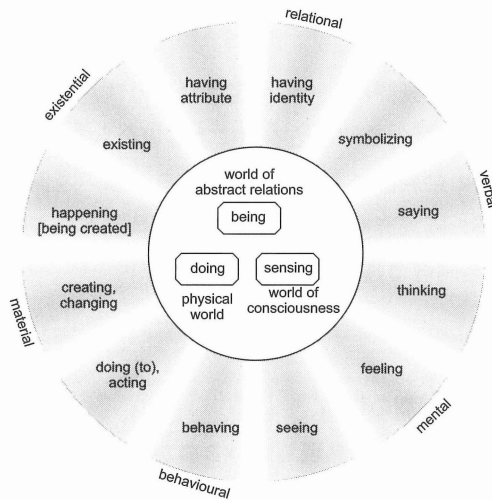


図 1 英語の過程型

(龍城 2006 : 43)

前にも述べたように、過程は過程中核部、参与要素、状況要素の三つで具現される。そして、過程型によってこれらの要素にどのようなものが具現するかが決まっている。それについて、以下で過程型の種類ごとに簡潔に解説する。

2.3.1 物質過程

これは物質的な働きをする過程のことで、具体的な動作を具現する過程のことである。たとえば、*make, break, write, go, fall* などが挙げられる。参与要素は行為者 (Actor) と対象 (Goal) の二つで、「物理的に何かをする」という概念を具現する。つまり、‘doing’ という過程と ‘doer’ という参与要素を必要とする。

(6) a.

The unicorn	made	no sound	in the lake.
Actor	Process: material	Goal	Circumstance

b.

Dragon	could only kill	the unicorn.
Actor	Process: material	Goal

このように過程中核部が動詞であるのに対して、対象は他動詞の直接目的語と言える。また、物質過程には、受益者 (Beneficiary) と呼ばれる参与要素が現れる場合があるが、これは目的語として参与要素を二つ含む節に具現するものである (龍城 2006 : 44)。

2.3.2 行動過程

breath, dream, snore, smile, hiccup, look, watch, listen などの生理的、心理的な過程を言う。そして、参与要素は行動者 (behavior) と行動 (Behaviour) の二つとなる。参与要素の行動者が一つ用いられ、それがある現象を感じる知覚者のように行動者も意識を持った存在として具現する。しかし、この過程では実際に何かを行うものと考えer必要がある。

(7)

The unicorn	lived	in a lilac wood.
behavior	Process: Behavioural	Circumstance: place

(龍城 2006 : 46)

2.3.3 心理過程

この過程は「感知する」過程を表すもので、人間が感知する「感じる、考える、知覚する」という三つの代表的なものがある。これらを感情的 (affective)、知覚的 (perceptive)、認識的 (cognitive) の三つに更に区分することができる。これは人間の内面行動、つまり心理的行動として表れる状態を具現するので、その点で物質過程とは異なっている。よって、この過程の参与者には、何かを「感じる」ものを表す感覚者 (senser) と、その何かによって「感じられる」「感じる」ものを表す現象 (phenomenon) の二つがある (龍城 2006 : 46)。

(8)

Mary	liked	the gift
Sencer	Process (Affective)	Phenomenon

(Halliday and Matthiessen 2004: 207)

また、心理過程の場合、see, know, hear, think などの過程は that 節を伴って具現する場合が多い。この場合は「現象」が独立した節として具現されることになるので、「現象」は直接的、あるいは間接的思考内容を独立した節に「投射された (projected)」ということになる。そのため、節としては「投射された節 (Projected clause) として具現する。

(9)

The wizard	thought	that the unicorn was very old.
Sencer	Process: mental	Phenomenon: Projected clause

(龍城 2006 : 46-48)

2.3.4 発言過程

人間の発話行為を具現する、つまり「言うこと」を具現するのがこの過程である。ここでの参与要素は発言者 (Sayer) と言内容 (Verbiage) の二つとなり、一つの名詞群である参与要素として具現するだけでなく、that 節を伴った「投射された節」として具現される。

(10) a. 一つの名詞群のみが参与要素となる例

The princess	said	"A unicorn".
Sayer	Process: verbal	Verbiage

b. 参与要素が独立節として投射された節の間接的言内容を表す例

The magician	said	that she mustn't catch you caged.
Sayer	Process: verbal	Verbiage

(龍城 2006 : 48-49)

2.3.5 関係過程

この過程は「存在している」、あるいは「所有している」という状態を表す過程である。これは人と人、人と物、物と物との関係が示されるが、代表的な過程中心部としては be 動詞がある。be 動詞の機能としては、ある参与要素の性質、すなわち属性を表す機能と、ある参与要素が他の参与要素によって同定されるのを表す機能の二つを持っている。

(11) a.

The unicorn	is	very old.
carrier	Process: attributive	Attribute

b.

The unicorn	is	the symbol of fantasy.
Identified	Process: identifying	Identifier

(11a)では参与要素は体現者 (carrier) と属性 (attribute) となっており、(11b)では同定者 (identifier) と被同定者 (identified) となっている (龍城 2006 : 50-51)。

また、この過程は be 動詞と同じような関係を示すものであれば関係過程となるので、be 動詞以外のものとして、appear, seem, need, look, belong to, become, represent, resemble, stand for などもある (龍城 2006 : 51)。

2.3.6 存在過程

この過程の機能は単に存在を具現することである。そのため、この過程にはただ一つの参与要素として、存在者 (Existent) が具現している。典型的なものとして there 構文が挙げられる。

(12)

There	was	no sound	in the Carnival after she was gone
	Process: existential	Existent	Circumstance

(龍城 2006 : 52)

3. 選択体系機能言語学の英作文指導への応用

2節で選択体系機能言語学では、文の要素をどのように分析しているのか概観した。その結果、文の要素は動詞の持つ意味機能によって、文中の他の要素とどのように結び付くかが決定付けられるということが理解できたであろう。これを踏まえて、本節では1節で調査した学習者の誤文から推測できる間違いの特徴をどのように解決すべきか考察していく。

筆者は調査の結果、学習者が間違いを犯す理由を『文法事項としての文の要素と、それらの意味、機能が結び付いていないため。』と仮定した。これが起こってしまうのは、龍城（2006：38）が言うように、学校文法のような文法用語での分析（主語、目的語などを用いたもの）では文の意味を的確に表せないと考えられる。そのために、選択体系機能言語学では、話し手が言いたい内容は過程と呼ばれる部分を用いて具現することとなる。この過程というものが、一般的な文法では節や文と言われるものに当たる。そのため、まず学習者には文というものは話し手が言いたいことを明確に伝えるものであることを認識させる必要がある。この認識は非常に重要なものと思われる。

また、文の要素の配列、つまり文構造は一見正しいが、意味が全く通らないナンセンスな文であることが、学習者の作る文には見受けられる場合がままある。これは、文法事項だけは知っているので、主語、動詞、目的語という具合に順番に当てはまる要素を並べるだけの作業であり、特に動詞の意味機能を全く考慮していない場合に起こってしまう。よって2節で述べたように、文の動詞をそれが持つ経験的意味に応じてまずはグループ分けをしていく必要があるだろう。

3.1 指導の手順

前述の事柄を踏まえて、指導する際に考えられる手順を具体的に以下にまとめる。

手順1：文の要素を動詞群、名詞群、副詞群および前置詞群に分類する⁵

手順2：動詞群の意味、機能を考える

手順3：名詞群、副詞群および前置詞群を決定する

手順1に関しては、リーディングの指導などでも「意味のまとまり」を考慮して、文を区切りながら読んでいく方法をとらせることが多いが、作文をする場合でもこの方法はとても重要である。自分が書こうとする文で使用する、または使用するであろう単語を、まずは図1のように大きく3つのグループに分類する。

次に手順2で、グループ分けしたのから動詞群を取り出し、動詞群の過程型を決定する。一般的な文法でも、動詞を他動詞と自動詞に区別し、目的語を取るか取らないか考えるが、そこから一步進んで、過程中核部（いわゆる動詞）の意味や機能からどの過程型に分類するか決定しなければならない。というのは、過程型によって節の他の要素である参与要素の種類が決定されているためである。逆に言えば、これをしないと参与要素も決められないのである。

最後に、過程中核部の種類が決まったら、それに合わせて名詞群、副詞群および前置詞群を置く。先にも述べたが、参与要素は何が節のどの位置に来るのか決まっているので、後はその過程型の規則に当てはめて、意味をよく考えながら並べていくだけである。

3.2 実例

ここでは3.1で述べた手順を実際の文（節）に当てはめて考えていく。

なお、実際に学習者に説明する場合は、専門用語は使用せず、学習者が自然に理解できるような平易な言い方をするのは言うまでもない。

次の日本語の文は、英訳問題として実際に授業で使用中のテキストに出題されていた問題である。

- (13) a. クモは昆虫ではないことを知らない人が多い。
 b. Many people do not know that a spider is not an insect.

b が正解の文であるが、この文を実際に前述の手順に当てはめていく。

①日本語の文を見て、英単語を書き出していく。

a spider, an insect, is not, do not, (that), know, many people

このように、使う可能性のある単語を出来る限り書き出しておく。この段階では、日本語の語順で書き出しておけばよい。また、日本語だけでははっきりしない、たとえば否定文の do や、接続詞 that は省いてもよい。また、この時、多少の意味のまとまりは考慮しておくが良い。

②並べた日本語を文法範疇にしたがって分類する。

動詞群：know, is

名詞群：a spider, an insect, many people

③動詞群（つまり過程中核部）を6つのうち、どの過程型に当てはまるかを決定する。

動詞群 know: 心理過程 (mental process: Cognitive)

動詞群 is: 関係過程 (relational process)

なお、(13)には文埋め込み節があるので、その分析も行うこととする(動詞群 is)。

④過程型の種類から参与要素を決定する。

know は心理過程なので、参与要素として Sencer と Phenomenon という二つの要素を具現する。そして、それぞれ Sencer が「何を感じるか」を表し、Phenomenon が「何かを感じられたり、感じ取れるもの」を表すため、Sencer は many people となり、Phenomenon は that 以下の名詞節となる。この節自体が名詞群とも言える。

そして、この節の中身も同じように参与要素を決定していくと、be 動詞 is の場合、is の前後を反転させて意味が通る場合は参与要素として Identified と identifier という二つの要素が現れることになるので、a spider には Identified を、an insect には identifier を当てる。この二つの参与要素の違いは、前者が同定者で後者が被同定者という違いで判断される。

4. 結 語

前節に示した例はたった一例であるが、このように動詞がどの過程型に属するのかを決定する段階で学習者は動詞の意味を考えることになる。そして、過程型を決定した後に今度は文中の他の要素との結び付きを、意味上の結び付きという点で考えなければならなくなる。こうすることにより、1節で述べたような「何となくそれらしい英語を書き、ナ

ンセンスな意味の文になってしまう」という状態から、「文中の要素同士の意味の結び付きを考えた、意味が通る文」が書ける状態に変化していくのではないだろうか。

今回の英作文指導に対する提案はまだまだ試案の域を出ないもので、学習者に対してまとめて指導を行っているものではない。そのため、今後は学習者に対してまとまった形での指導を行う必要がある。そして、実際に効果があるのかを実証しなければならない。また、具体的な指導内容に関して言えば、過程型が全部で6種類あるため、どのようにすれば簡潔にまとめられるのかを熟考しなければならないし、過程型の境界線は曖昧なため、判断が難しいものも存在する。よって、その辺りの区切り方も考えなければならない。ただ、この指導法は今までの指導法に足りない部分を補うものとなる可能性は高いと言える。

日本における英語教育には様々な問題があるが、特に初級英語学習者の場合を考えると、様々な文法事項を習ったとしても、なかなか定着させるのが難しいのが実情であるし、多くの学習者が持つ英語への意識は「やらされている」という消極的なものとも言える。こう思わせてしまうのは、英語も日本語も同じ人間が実際に現実社会の中で使用しているものだという視点が持てないからである。この状況を打破するためにも、文法の規則ばかりに目を奪われず、文の持つ意味にもっと目を向けていくことが必要だろう。選択体系機能言語学の基本的な姿勢はまさに、「社会の中で使われている言語の機能」という考え方なのだから、その果たす役割は大きいだろう。この指導法がその一助になれば幸いである。

注

- 1 今回の誤文分析では、三人称単数現在の -s の脱落などの細かい文法の誤認については考慮していないので、たとえ間違いが見られたとしても、

今回は議論の対象から外した。これは、今回の研究の目的が、正しい語順で意味の通る英文を書くことだからである。

- 2 Quirk *et al* (1985: 53) は以下のように節の構造に、従来の 5 文型に加えて二つの新たな型を導入している。追加されたのは、5 文型には含まれていない節の副詞的な要素である副詞群 (adverbials) を含む要素を持つ節となる (表の太字の部分)。

Type SV	Someone was laughing
Type SVO	My mother enjoys parties
Type SVC	The country became totally independent
Type SVA	I have been in the garden
Type SVOO	Mary gave the visitor a glass of milk
Type SVOC	Most people consider these books rather expensive
Type SVOA	You must put all the toys upstairs

S (Subject : 主語)、V (verb : 動詞)、O (Object : 目的語)、C (complement : 補語)、A (adverbial : 副詞群)

- 3 過程型それぞれについての説明は、特に基本的な事柄だけに絞った。これは、学習者に理論を応用して指導する際、まずは文の要素の意味と機能に着目させるのが目的であるから、あまりに細かい事柄は現段階では必要ないと考えるからである。だが、この理論自体は Halliday and Matthiessen (2004: 168-305) にあるように、かなり広がりのある複雑なものとなっている。
- 4 この例は (Halliday and Matthiessen 2004: 201) を若干修正している。
- 5 この分類では、一般的な文法で言う Complement が浮いてしまう形になるが、選択体系機能言語学では文法範疇よりも経験的意味範疇を中心に考えるため、参与要素の一つとしての機能を果たすものとなる。よって、そのまま何にも分類されなくても問題はない。

参考文献

- Eggs, S. (1994) *An Introduction to Systemic Functional Linguistics*. London: Pinter.
- Halliday, M.A.K. (1978) *Language as Social Semiotic: The Social Interpretation of Language and Meaning*. London: Edward Arnold.

- Halliday, M.A.K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar 2nd edition*. London: Arnold. (山口登 笈壽雄 訳 (2001) 『機能文法概説：ハリデー理論への誘い』 東京：くろしお出版)
- Halliday, M.A.K. and Matthiessen, C.M.I.M. (2004) *An Introduction to Functional Grammar, 3rd edition*. London: Arnold.
- Martin, J.R., Matthiessen, C.M.I.M. and Painter, C. (1997) *Working with Functional Grammar*. London: Arnold.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., and Svartvik, J. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman: London.
- Thompson, G. (1996) *Introducing Functional Grammar*. London: Arnold.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』 東京：くろしお出版
- 龍城正明 (1997) 「選択体系機能言語学における基本概念と主要述語：transitivityの解釈を中心に」 『言語』 4月号 東京：大修館書店 pp. 86-97
- 龍城正明 (2006) 『ことばは生きている 選択体系機能言語学序説』 東京：くろしお出版
- 山口登 (2000) 『選択体系機能理論の構図』 小泉保 (編) 『言語研究における機能主義』 東京：大修館書店 pp. 3-47
- 綿貫陽 淀縄光洋 マーク・F・ピーターセン (1994) 『教師のためのロイヤル英文法』 東京：旺文社
- 綿貫陽 宮川幸久 須貝猛敏 高松尚弘 (2000) 『徹底例解ロイヤル英文法改訂新版』 東京：旺文社

